

Title	チョーサーとテイル・ライム・ロマンス
Sub Title	Chaucer and Tail-rhyme romance
Author	岩崎, 春雄(Iwasaki, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.177(13)- 189(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

チ ョ ー サ ー と テ イ ル ・ ラ イ ム ・ ロ マ ン ス

岩 崎 春 雄

§ 1. チョーサーは言語感覚の鋭い人であったようである。彼の作品を読んでいると、そのことを明示、及至は暗示している文章におつかることがしばしばある。彼の特徴と思われるものの一つは、表現の方法や言葉遣いというものに関して批評めいたことを述べることであって、之は次のような例にみられる。このような口調は少くとも Bibliography に挙げた他の作家の作品にはみられない。

(1)(a) Til that the bright sonne loste his hewe ;

For th'orisonte hath reft the sonne his light—

This is as much to seye as it was nyght !— (FranklT. 1016-8)

(b) The dayes honour, and the hevenes ye,

The nyghtes foo—*al this clepe I the sonne— (Tr. 2.904-5)*

(2) And so bifel, whan Phebus was absent,

His wyf anon hath for hir lemman sent.

Hir lemman? Certes, *this is a knavyssch speche !*

Foryeveth it me, and that I yow biseche.

... ..

But that the gentile, in estaat above,

She shal be cleped his *lady*, as in love ;

And for that oother is a povre womman,

She shal be cleped his *wenche* or his *lemman*. (*MancT.* 203-220)

(3) “Rys up, my wyf, my love, my lady free !

The turtles voys is herd, my dowve sweete.

The wynter is goon with alle his reyne sweete.

Com forth now, with thyne eyen columbyn !

... ..

Swiche olde lewed wordes used he. (MerchT. 2138-48)

(4) But trusteth wel, I am a Southren man,

I kan nat geest 'rum, ram, ryf' by lettre. (*ParsT.* 42-3)

(6) Now swich a rym the devel I biteche !

This may wel be rym dogerel, quod he. (*Thop.* 924-5)

上例(1)の(a)と(b)は常套的な rhetoric に対する揶揄とも考えられるもので、(a)の方は、「夜になった」という意味のことを rhetorical な表現で述べておきながら、すぐそのものずばりの表現で置き換えてしまっている。(b)の方は OE のケニングに類する表現であるが、これまた普通の語で言い換えてしまう。伝統的な rhetoric を充分わきまえていながら、尚且つ示すこのような口調は、同時代の同じく宮廷詩人であった John Gower のそれとは対照的なものである。また、チョーサーは中世の常套的な物語作者がしばしば、自分の物語の 'matere' や 'sententia' に関係の無い叙述や描写を入れることを、作品を損うものと考えていたらしく、'shortly for to seye' 等の句をしばしば用いて、常套的な手法においては当然予期されたであろうような叙述や描写を省いている。このことは、前述の常套的修辞法に対する批判と関連があるかもしれない。

(2)に挙げた引用文は語彙に関するものである。チョーサーはここで *manciple* の口を借りて、'lemman' というのは品の悪い言葉であり、身分の低いものについて用いるのがふさわしく、女の場合でいえば、身分の高いものには 'lady' という語を使う、という⁽¹⁾意味のことを述べている。この語はしかしながら *Tail-Rhyme Romances* や *Lyrics* などでは、その現われる context 及至 situation をみると、特にそのような悪い語感はないようである。仙界の女王でも *lemman* と呼んで一向差支えないし、キリストについてすらも用いられることがある。一方、チョーサーは、かなり厳格にこの語を使い分けている。大体において、この語で指される人物の身分の低い場合、ないしは品性の劣る場合に限られている。その良い例としては、例えば *CT* で *monk* がサムスンの不実な恋人デリラに対して *lemman* という語を用いているのに対応して、⁽²⁾*Wife of Bath* もデリラを指す時に限って *lemman* を用い、他の箇所では *lady* 又は *love* を用いている。これがチョーサーだけの偏見でないことは、ガウアーもこの語を殆ど全く用いていないことからほぼ確認できるのであるが、同じ宮廷詩でも *West Midland* の頭韻詩、例えば *Pearl* などでは事情が異なり *lemman* は悪い意味を伴うことなく頻繁に用いられている。

(3)の引用文は商人の話の中で、January という盲目のおいばれ騎士が、その熱愛する若い妻 May に呼びかける言葉であって、大部分が *The Song of Solomon* から借用し

た文章であることが知られている。従って文章そのものは雅びやかなものであっても、それを使う人物及び使われる場面を変えることによって、humorous な効果を狙ったチョーサー独特の手法であると考えられる。そして January の台詞の後で、‘Swiche olde lewed wordes used he’ とつけ加えたのは、*The Song of Solomon* そのものに対する評言ではなく、このような老騎士がこのような若い妻に、かくものぼせ上って痴態を演じていることに対する批評と考えるのが良いであろう。

(4)の引用文は Parson の口を借りて、頭韻詩に言及している箇所、価値判断は伴っていないようであるが、*Reeve's Tale* で二人の北方出の学僧を描いていること、そのほか（たとえば *Troil*, V, 1793—98）も考え合わせると、チョーサーとその聴衆ないし読者はロンドン以外の地域の方言及び詩形存在を承知していたものと考えてよい。

(5)はチョーサー自身物語るところの Sir Thopas の話に、Tabard の亭主が酷評を下しているところであり、当時の庶民階級の文章の最も陳腐な手法を、大へんこみ入った形で批評している箇所の一部分としてよく引用される。

以上の5例は、それぞれ次元を異にしているが、チョーサーが表現の方法や言葉遣いに対する批評ないし言及を特に明言して行っている例としてここにまとめてみた。之らがいずれも後期の作品に出るということは重要視してよいであろう。次に彼の批評眼が内に潜んでいる場合を主として TR との関連から観察した結果を少しばかり述べてみることにする。全体の傾向をかいつまんで言えば、チョーサーは TR 特有の語彙ないし語句を初期の作品にも後期の作品にも使っているが、その用い方には根本的な相違が認められる。後者の場合には、大てい皮肉を裏にこめたひねった使い方をしていることに注意すべきであろう。次に挙げる多くの例がそのことを示している。

§ 2. Gentil, fre, curteis, hende etc.

この四語は TR では頻繁に用いられるものであって、A. J. Bliss が *Sir Lannfal* につけている註によれば、これらの意味内容は殆ど同じであるが、前二者は birth について、後二者は behaviour について用いられるということである。⁽⁴⁾ チョーサーにも之らの語は用いられているが、TR と対比した時、特に注意すべきは、既に E. T. Donaldson が指摘しているように、⁽⁵⁾ ‘hende’ という語であって、チョーサーでは CT と *Romaunt* にしか現われず、CT では決してまともな取扱いを受けていない。CT の例の殆どは *MillT* で、ここに登場する Oxford の学僧は ‘hende Nicholas’ と呼ばれているが、その行いたるや、決して TR で用いられている hende の形容に値しないものである。この語は先

に挙げた *lemman* と共に、インテリと一般大衆との間で、一つの語に対して語感の差の生じた例の一つとなるであろう。ここで再び *lemman* に於けるのと類似な事実があることは興味深い。即ち同じくロンドンの宮廷詩人であるガウアーもこの語を殆ど全く用いていないのに対して、West Midland の宮廷詩 *Sir Gawain and the Grren Knight* に於ては、価値の下落を伴うことなく頻繁に用いられているのである。限られた資料から敢えて推論を下すならば、これらの語における *devaluation* はロンドンのインテリ階級の間に生じたものと思われる。

ところで、上記の四語を *and* を用いて組み合わせることが TR では盛んに行われている。一般に類義語を併置する手法は ME の特徴であって、チョーサーも例外ではなく、散文の説教及びそれに類するもの、即ち *The Parsons Tale* と *The Tale of Melibee* に特に多い。しかし、之ら四語の場合は、チョーサーの余り好まぬところであって、全作品中、僅か一例に過ぎない。之は TR の *Amis and Amiloun* 一篇だけでもこの種の句が10回以上も出るのに較べると極端に少ないことが解る。そしてその唯一の CT の例には何か意味ありげな口調が窺われるのである。

Oure Hoost tho spak, 'A ! sire, ye sholde be *hende*

And curteys, as a man of youre estaat; (*FrProl.* 1286-7)

この箇所は、Friar が Summoner へのあてつけの話を始めようとするところへ、Tabard の亭主が Friar をたしなめて、貴方のような御立派な方は礼儀をわきまえなければならぬ、と言っているところである。ところがチョーサー描くところのこの Friar は、教団きっての稼ぎ手であり、歌もうまければ腕力も強く、希代の女たらしで、どの町の宿屋や酒場でも顔が売れていたという口八丁、手八丁の人物であって、'as a man of your estaat' というのは皮肉に他ならない。彼の描写の中で、この小論の観点から我々の注意を惹くのは、'His nekke whit was as the flour-de-lys' (*GenProl.* 238) である。'百合の花のように白い' という simile は普通女性描写に用いられるものであって、この Friar のような ('Therto he strong was as a champioun' (*GenProl.* 239)) 男性の首すじにはふさわしくないものである。この2行は対照の妙を狙ったものと考えられるし、又 O.E. Horton によれば、首すじの白いのは *licentiousness* を表わすという。ところでこの simile は TR にはしばしば現われるものであり、チョーサーに於てもごくまともに用いられている例も見出されるのであるが、この Friar の描写をみると、どうもこの句は彼の批評眼の対象となっているのではないかという疑いをもたせるものである。ここは E.T. Donaldson の次の評言がそのまま当てはまるといってよい。

the trick enables him (=Chaucer) to evoke for the reader the hackneyed context, with all its associations, in which the phrase usually appears, while at the same time the poet can make litelial use of the phrase's meaning in his own more realistic description.⁽⁸⁾

更に、ロマンスの主人公にふさわしいような表現が、Friar に就いて次のような Context で用いられているのも上記の描写と軌を一にするものである。

And over al, ther as profit sholde arise,

Curteis he was and lowely of servyse.

(*GenProl.* 249-50)

このようなことを念頭において、Hoost がこの Friar に向って 'hende and curteys' でなければいけないと TR 特有の phrase でたしなめているのを聞く時、我々は、先に述べたようにチョーサーがこの Hoost に、Sir Thopas の話を聞くに耐えないとしてさえぎらせていることを併せて想起するのであり、ここは複雑な笑いを誘う箇所であるといわざるを得ない。ここはチョーサーが明らかに意識してふざけて書いているのであり、CT が *Rahmenerzählung* といっても各部分が互いに緊密に関連していることを示すものである。

Hoost は庶民階級に属している。従って TR にはお馴じみの筈で、その phrase が口をついて出ても不自然ではないわけで、先に Thopas の話を止めさせたのは、自分の承知している TR とはいささか勝手が違うので冠を曲げたものと解釈できる。いずれにしても、この Hoost の描き方にはチョーサーの並々ならぬ配慮の程が窺われるのである。

次に、類義語ではないが、同じく and で形容詞を結合した set phrase で、TR に多くチョーサーに少ないものの二、三の例を挙げれば次の通りである。⁽⁹⁾

(1) fair and gent (*Thop.* 75) [*Emare* 55, 191, 403; *Amis* 1766; *R and O* 1144]

(2) fair and fre (*Rom A* 633) [*R and O* 238, 274, 650, 1590; *Emare* 22, 71, 831, 963; *GuyW* 45.6; *Tars* 562]

(3) fair and bright (*PardT* 774; *BD* 950, 1180; *Rom A* 855, 1603) [*Amis* 532, 895, 1576, 2401; *Emare* 45, 711; *Beues* 27; *GuyW* 16.5]

之らはいずれも TR 臭の強いものであって、CT で用いられた場合は、多かれ少かれ皮肉な笑いが背後に潜んでいることが多い。例えば(1)は例の *Thopas* にのみ現われ、Donaldson のいうように Thopas がまるで女性のように描写されているところが面白い。(3)は主として女性の形容句(男にも用いられないわけではない)であるものが、

PardT では金貨について用いられている。(2)は、(*Rom A* のような) 初期の作品では、*TR* の *set phrase* が単純に採り入れていることを示す例の一つである。

§ 3. Alliterative Phrases.

次に *alliterative phrase* の中で興味を惹くものに次のものがある。下例の中[3]、[4]、[5]は典型的な OE の *alliterative phrase* の型を伝えているものとして注意すべきものである。⁽¹⁰⁾

- (1) *mochel of myght* (*Rom A* 1087/cf. *qui ot grant force RR* 1076) [*Launf* 475, 521, 588; *Amis* 868; *Ath* 593; *Deg* 1613; *R and O* 143; *R and V* 739; *GuyW* 76.2 *Toulouse* 39, 910]
- (2) *byrde in bour* (*Romt A* 1014/cf. *une espousée RR* 1004) [*Launf* 548, 750; *Deg* 1149]⁽¹¹⁾
- [3] *styf in stour* (*Romt A* 1270/cf. *gens RR* 1256) [*Toulouse* 1211; cf. *Deg*, *Cleges*]⁽¹²⁾
- [4] *bright in bour* (*Thop* 742) [*GuyW* 11.6, 15.9, 19.1; *Launf* 548, 629; *Deg* 1149]⁽¹¹⁾
Amis 66, 334, 430, 560, 578, 1518; *R and O* 620]
- [5] *worthy under wede* (*Thop* 917) [*Emare* 250, 366, 612; *Deg* 236, 592, 1112, 1276, 1908]
- (6) *fair of face* (*ProlThop* 702; *ShipT* 28) [*Emare* 373; *R and O* 614, 1072; *Melayne* 844]

さて、(1)、(2)、[3]は *TR* に多いがチャーサーでは *Rom A* にしか出てこないものである。之らら原文の *OF* と較べてみると、(1)はともかくとして、(2)、[3]は *OF* の一語を、全く趣の異なる *alliterative phrase* で置き換えてしまっている。しかし後期の作品に於けるような皮肉な意図は認められず、単に自国の文学から得た *phrase* を利用しているに過ぎない。[4]、[5]はいうまでもなく、*Thop* で皮肉まじりに用いられているもので、繰り返していうように、チャーサーの *TR* の常套句の用い方は、初期の作品と後期の作品とでは根本的に態度が異なるのである。(6)は、チャーサーでは *CT* 以外に現われず、特に *ProlThop* の例は、*Tabard* の亭主がチャーサーをからかう台詞の中に出てくるのであって、先に述べたように、チャーサーがこの *Hoost* に '*hende and curteys*' というこまれた *TR* 特有の語句を用いさせていることを考え合わせると、どうもこの人物の言葉は、単純に書き流されているのではないという気がするのである。

§ 4. Simile.

TR と対比した場合、Simile に関しても興味深い例を見出すことができる。

(1)(a) *As whyt as lylve or rose in rys* (*Rom A* 1015/cf. *Et blanche comme flor de lis* *RR* 1005)

(b) *And therupon he hadde a gay surplys*

As white as is the blosme upon the rys (*MillT* 3323-4)

Cf. *red as rose on rys* [*Launf* 937]

her rod as pe rose on ryse [*Deg* 534]

rode red so blosme on brere [*Tars* 14]

bright as blosme on bowz [*Ath* 72, 290, ; *Launf* 934]

上例では先ず、rys も blosme も共にチョーサーでは非常に頻度の低い語であることに注意すべきである。rys はここに挙げた2例のみであり、地方言的色彩があり、blosme は之を語幹とする動詞、形容詞をも含めて9回、その中5回は bowe 又は braunche と alliterate しているという、その頻度も使われ方もかなり限られた形をとっている語である。ところで上のチョーサーの2例を TR の類句と較べてみると、かなりの類似点をもっていることが容易に見出される。(1)(a)の *Romaunt* の例では、行の後半を、OF の原文に該当句を持たない TR 特有の表現で埋めている。しかしここでは特殊なニュアンスは認められず、あり合わせの語句を利用したものと考えてよいであろう。しかし、*MillT* の例になると、その用い方には根本的な相違があることが明らかである。ここでは TR の常套句をつきまぜた形である上に、Donaldson が既に指摘しているように、女性描写に用いられる表現が学僧アブソロンの、しかも着物について用いられているのであるから、三重にひねってあるわけである。

(2) *White was his face as payndemayn* (*Thop* 725)

Cf. *Her heed, for hor was whyt as flour* (*Rom A* 356/cf. *Toute sa teste estot chenuë*,/*Et blanche cum sel fust florie* *RR* 346-7)

He wax pe fayrest chyld onlyfe,/*Whyt as flour on hylle* [*Emare* 228-9]

whyt as flour [*Launf* 261, 387, 742; *Emare* 729, 946]

上の *Thopas* の例であるが、「上等のパンのように白い」というのはどう考えても騎士の顔の形容として適切であるとは思えない。普通「～のように白い」という時に TR では 'whyt as flour' という phrase が頻繁に用いられる。この flour という語は ME で

はこの綴りで「花」と「パン粉」の両方を表わし得た。もともと同じ語である。このことから Bliss は *Launfal* に附した註で、*flour* はパン粉の意味ではないかと考えている⁽¹³⁾が、Bliss は *Thop* の例を頭に浮べていたのではないと思われる。少なくとも *Launfal* に現われるすべての例をみても「花」とも「粉」とも断定する決め手はない。もし *Thop* が *Launfal* よりも早く書かれているとしたら、Bliss の説も可能性がある。しかし逆に次のように考えることもできる。*Launf* では仙界の女王、女王が *Launfal* に与えた馬、同じく彼女が *Launfal* に与えた鎧がそれぞれ花のように白い ('whyt as flour')

Thop で Sir *Thopas* が仙界の女王にめぐり合わない中に「百合の花のように白い」鎧を着用しているのは皮肉なのではないか。白い馬、白い着物のことは *Orfeo* にも出てくるもので、⁽¹⁴⁾チャーサーはいずれかを読んだかもしれない。

しかしいずれにしても推測の域を出ず、いずれが先に書かれたものか確定的なことは解らない。一方 *RomA* 356の例は原文の OF からみて確かに「花」の意味である。次の *Emare* の例も「花」の意味であることに間違いない。この他 'whyt as lylve flour' などの例もあり、「花」と断定し得る例は存在するが、「粉」の方は、少なくとも今回の資料からは発見できなかった。そこで仮に推論を立ててみると次のようになる。

'whyt as flour' というのは余りにも陳腐な TR 的な simile で、チャーサーは之を使うことを避けた。(現に *RomA* にしか現われない) Sir *Thopas* の物語では、彼の茶目気がこの句にも及んだのである。つまり「花」の意味の flour から「粉」の flour を考え、その連想から *payndemayn* をもってきたのではないか。即ち一つの段階をとり越えた地口である。この推論が正しいとすれば、この句はチャーサー独特のまことに humorous な効果をもつものである。

(3) His rode was red, his eyen greye as goos (*MillT* 3317)

cf. (a) rode—lyk scarlet in grayn (*Thop* 727)

cf. rode red as rose on rys [*Launf*, *Deg*, *R* and *O* etc.]

(b) Hir nose tretys, hir eyen greye as glas (*GenProl* 152)

With kamus nose, and eyen greye as glas (*RvT* 3974)

cf. yen greye (*Rom A* 546, 822, 862) [*Launf*, *Tars* etc.]

Hur eyen grey as any glas [*Toulouse* 343]

Her izen graye as glas [*Libeaus Desconus* 943]

上例の *MillT* 3317 を検討するわけであるが、先ず rode という語は、TR にはよく現われるが、チャーサーではここに挙げた2例だけで、方言的色彩が強く、且つその現わ

所が *Thop* と *MillT* であることは注意を要する。Donaldson のいうように、この語は女性について用いられるのであって、Absolon や Thopas を修飾するのは滑稽である。後半の 'eyen greye as goos' というのは、'eyen greye as glas' というロマンス風の simile をもじったものである。TR で今回の資料から見出し得たのは *Toulouse* 343 の一例のみであるが、Bryan-Dempster には *Libeaus Desconus* 943 の例もあり⁽¹⁵⁾、実際にはもっと多く存在するものと予想される。この比喩が popular であった証処の一つは、Manly-Rickert をみると、*MillT* の例は重要な写本では 'goos' となっているのに、いくつかの写本では 'glas' となっていることである。次の行末は 'shoos' という語であって、rhyme のためにも 'goos' とならなければならないのに、なお 'glas' と書く写字生がいた程、常套的な句であったと考えることができる。単に 'eyen greye' という句は TR に容易に見出すことができる。チャーサーはしかし、之を *RomA* でしか用いていない。ところで上の 'eyen greye as glas' という simile は、チャーサーでは2回のみで、上に示したようにいずれも CT に現われる。この2例共、例によって笑いを誘うような使い方をしている。*GenProl* 152 の例は、Prioress の描写である。この尼僧院長は優雅を旨とし、宮廷風礼節を身につけるのに汲々としている女性で、フランス語も「いと雅びやかに」お喋りになるのであるが、遺憾ながらパリの標準フランス語ではない。チャーサーは、ここで fair and fetisly という地方的色彩の強い修飾句を用いているし、今問題にしている simile に於ても、後半のみならず、前半の tretys もロマンス風の語であるから、結局チャーサーは特殊な語感・連想を特つ phrase を巧みに利用してこの尼僧院長を穏やかな諷刺の対象としているのである。*RvT* 3974 の例は、粉屋の娘の描写であるが、とてもこの simile をもって表わされようななおやかな女性ではないのである。且つ前半に用いられている kamus という語はチャーサーでは *RvT* にしか現われない語⁽¹⁷⁾で、「鼻べちゃ」という意味であるから、この passage の前半と後半の形づくる対照は大へん滑稽なものである。

さて *MillT* の例へ戻ると、このまともな取り扱いを受けていない 'eyen greye as glass' をもじった上に、前半も TR 特有の表現であり、且ついずれも女性の修飾句であるものが男性について用いられているのであるから、この passage 聴衆ないし読者の笑いを誘わずにおかなかったに違いない。*GenProl* 152 の例では恐らく穏やかな笑いであつたろうが、*RvT* と *MillT* の例では、それぞれの話にふさわしくより高らかな笑いであつたろう。

§5. さて、いささか重箱のすみをつついた感があるが、この種の調査を行ったのは、チョーサーが如何なる種類の自国文学からどの程度の影響を受けているかということが言語の面からある程度明らかになるのではないかと考えたからである。一般にチョーサーは外国文学に育くまれて成長し、創作したといわれている。しかし英国人である彼が最初から最後まで英語でものを書いている以上、自国文学と全く没交渉であり得たと考えるのは不自然である。そこで今回は TR との関係を少しばかり調べてみたわけであるが資料が十分ではないので、今後の調査ではまた多少異なる結果が出ることもあり得る。一応今回の結果のみに話を限れば、既に触れたように、次のような傾向がみられる。つまり、チョーサーは習作時代には TR の常套句を無批判に、或いは止むを得ずかもしれないが、とにかく受け入れ、それらを TR で用いられるのと同じ意味合いで用いた。即ち特別なニュアンスをもたせることはなかった。しかし後期の作品になると彼の態度には変化が生ずる。即ちこの種の phrase 使わなくなるか、或いは使う⁽¹⁸⁾となると大ていの場合、皮肉をこめた使い方⁽¹⁹⁾をしているのである。それらは専ら CT に表われる。CT で ironical な使い方をされているものの中には、習作時代にも現われなかったもの⁽²⁰⁾も多い。CT には更にもう一ひねりした使い方⁽²¹⁾をしているものもある。これらが専ら CT に現われるということは重要なことである。彼の創作態度の独自な変化・成長というものをこの作品に至って、言語の上からも明瞭にみてとることができるのである。

ところで TR は East Anglia で専ら発達したものであるらしい。また Karl Brunner が標準英語の成立を調べるに当って、当時の demography を研究した結果によると、1066年から1360年の間にロンドンに流入した人口を地方別にみると後期には Norfolk 次いで Suffolk からが最も多いということである。⁽²²⁾又 J. C. Russel によると、1307年以前と1307~1365年とではロンドンの上流階級の構成に変化がある。彼の研究は alderman, sheriff の出身地を調べたものであり、やはり後期には East Midland 出身者が非常に多くなっている。⁽²³⁾このようなことを考え合わせると、TR がこれらの人達によってロンドンへもたらされ、チョーサーがその影響を受けたということが推測される。そして、その影響の受け方ないし受け入れ方がどのようなものであったかは既に述べた通りであって、一般に人が漠然と承知しているところであるが、言語面から具体的にあとづけを試みた次第である。

(24)
BIBLIOGRAPHY

Texts : —

The Complete Works of Geoffrey Chaucer, ed. F. N. Robinson, 2nd ed., 1957,
OUP. (The same abbreviations as in Robinson are used in this article.)

Tail-Rhyme Romances. [TR]

Amis and Amiloun, ed. Leach, EETS. OS. 203 (1937) [*Amis*]

Athelston, ed. Trounce, EETS. OS. 224 (1957) [*Ath*]

Sir Beues of Hamton, ed. Kölbing, EETS. ES. 46 (1893) [*Beues*]

Sir Cleges, ed. Treichel, ESt XXII (1896) 345 ff. [*Cleges*]

Sir Degrevant, ed. Casson, EETS. OS. 221 (1949) Lincoln MS. [*Deg*]

The Romance of Emare, ed. Rickert, EETS. ES. 99 (1958) [*Emare*]

Sir Launfal, ed. Bliss, Nelson's Medieval and Renaissance Library, 1960 [*Launf*]

The King of Tars, ed. Krause, ESt. XI (1887) Iff. [*Tars*]

The Sege off Melayne, ed. Herrtage, EETS. ES. 35 (1880), pp. 1-52.
[*Melayne*]

The Romance of Duke Rowland and Otuell, ed. Herrtage, EETS. ES. 35(1880),
pp. 55-104. [*R and O*]

Rouland and Vernagu, ed. Herrtage, EETS. ES. 39 (1882), pp. 37-61. [*RandV*]

The Romance of Guy of Warwick, ed. Zupitza, EETS. ES. 49 (1887), pp. 384-
490. [*GuyW*]

The Earl of Toulouse, ed. French and Hale, *Middle English Metrical Romances*,
Prentice-Hall 1930, pp. 383-419. [*Toulouse*]

Le Roman de la Rose, ed. W. W. Skeat, *The Works of Geoffrey Chaucer*, vol. I,
pp. 93-164 [RR]

References : —

Brunner, K: "Die Herkunft der anglischen Elemente in der frühen englischen
Schriftsprache", *Mélanges de Linguistique et de Philologie*, F. Mossé in
Memoriam, Paris, 1960, pp. 49-55.

Bryan and Dempster: *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales*,
Chicago, 1941 [Bryan-Dempster]

Donaldson, E. T. : "Idiom of Popular Poetry in the *Miller's Tale*", *English Institute Essays* (1950), Columbia University Press, pp. 116-140.

厨川文夫:「チョーサーと地方言文学」英語青年, vol. 108, Nos. 3-6 (1962)

Manly and Rickert: *The Text of the Canterbury Tales, studied on the basis of all known manuscripts*, Chicago, 1940. [Manly-Rickert]

Oakden, J. P. : *Alliterative Poetry in Middle English, A Survey of the Traditions*, Manchester University Press, 1935.

Russel, J. C. : "Medieval Midland and Northern Migration to London 1100-1365", *Speculum*, vol. 34 (1959), pp. 641-645.

Trounce, A. McL. : "The English Tail-Rhyme Romances", *Medium Aevum*, vols. 1-3, 1932-4.

(附記: 本稿は昭和38年6月25日、日本英文学会第35回大会(於同志社大学)において発表した原稿に若干の加筆訂正を加えたものである。尚、発表後、廣島大学榊井迪夫教授の御好意により E.T. Donaldson の論文を読む機会を得た。また本大学厨川教授からは多くの貴重な示唆、及び助言を得た。茲に心から感謝の意を表する次第である。)

◀(1) 以下に於て TR と略する。尚本論に用いる省略形については Bibliography を参照されたい。

◀(2) *M&T* 2063

◀(3) *WBT* 722

◀(4) *Sir Launfal*, p. 94, notes, 524-5

◀(5) 'Idiom of Popular Poetry in the *Miller's Tale*, pp. 122-125.

◀(6) 'whyte as lylve floure' *Emare* 66, 205; *Ath* 70; 'whyte as lylve in May' *Launf* 292.

◀(7) e. g. 'As whyte as lylve or rose in rys' *Rom A* 1015.

◀(8) 之は As whit as is the flosme upon the rys (*MillT* 3324) に関する Donaldson の解説である。op. cit., p. 129.

◀(9) 以下、チョーサーの例を()で、*The Romaunt of the Rose* B, C; *Le Roman de la Rose*; Tail-Rhyme Romance の例を[]で示すことにする。

◀(10) cf. heard under helm *Beowulf* 342, geong in gearum *ibid.* 13 etc.

◀(11) bryst berde in bour *Launf* 548.

◀(12) stalworthe in stowres *Deg* 1061, 1129; strong in stowre *Cleges* 504.

(13) *Sir Launfal*, p. 89, notes, 261.

(14) *Sir Orfeo* II, 145-6, ed. K. Sisam, *Fourteenth Century Verse and Prose*, p.18.

(15) Bryan-Dempster, p. 507.

(16) 他には *RomA* にしか用いられていない。

- (17) この娘の父親の描写に出てくる。父娘共に *kamus nose* をもっているわけで、Reeve が Miller に対するうっぶんを晴らしていることにもなる。
- (18) *fair and fre, mochel of myght, byrde in bour, styf in stour etc.*
- (19) *hende, fair and bryght, eyen greye etc.*
- (20) *hende and curteys, bright in bour, worthy under wede, eyen greye as glas etc.*
- (21) *whyt as payndemayn, eyen greye as goos etc.*
- (22) Bibliography 参照
- (23) Bibliography 参照
- (24) [] 内は本論文中に用いた省略形である。